

環境省環境研究総合推進費

クマ類の個体数推定法の開発に関する研究 平成 22 年度第 2 回 AD 会合

書面コメント

大井徹

第 2 回会合は都合のため出席できず、会合終了後に専用ウェップサイトの資料を参照してのコメントになる。第 1 回会合から強く印象を受けていたことだが、明確な目標設定のもと、優秀な人材をうまく組織化した実施体制が作り上げられている。さらに、調査員の努力もあり今年度行われた大面積調査地でヘアトラップでのサンプル数、遺伝子分析成功率は、国際的にみても高い水準のものとなり、必要な分析を行う基盤が十分整ったと評価できる。そのため、あらかじめデザインされた DNA 分析、自動撮影による個体識別による方法それぞれについての問題点が具体的に指摘できるようになった。問題点のそれぞれについては、資料の中すでに十分述べられているので、ここではあらためて指摘しない。また、解決方法については、来年度で検討、解決していくものであると考える。

しかし、次の段階で考えておくべきことは、都道府県レベルあるいはそれを超えた個体群毎に生息数推定が行われる場合における、現実的な予算規模、調査面積にあわせた調査のデザインである。各都道府県、個体群におけるクマの生息地は今回の大面積調査地をはるかに超える面積を有し、その中のクマの生息環境、従ってクマの密度も様々である。その一方、調査予算は数百万円から 1 千万円程度とわずかである。むろん国家事業として超大規模な生息数調査事業を行うという可能性もあるが、大地震による大災害等諸事情を見ると現実的ではないだろう。そのような実際の調査地域のスケールと予算を前提として、このプロジェクトで検討されている DNA、自動撮影による個体識別を用いた調査法が、それぞれの利点、欠点を考慮してどのように活用されるべきなのか、現実にあわせた調査のデザインを検討、示す必要があると考える。